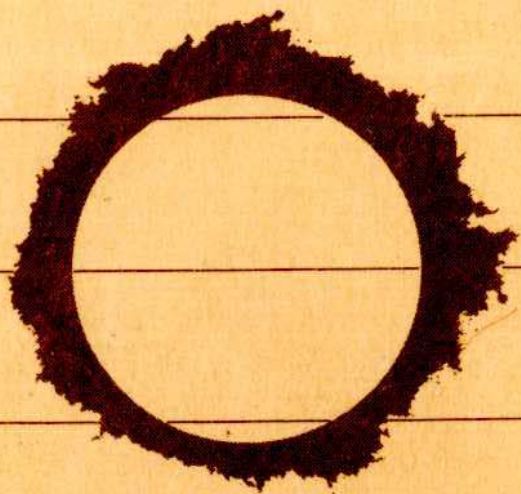


日本語の作文技術

本 多 勝 一



本多勝一（ほんだ かついち）

1932年、信州・伊那谷生まれ。京都大学農林生物学科から朝日新聞社入社。東京本社校閲部・北海道支社報道部・東京本社社会部を経て、現在編集委員。

著書『NHK受信料拒否の論理』（未来社）

『貧困なる精神』シリーズ（朝日新聞社）

『50歳から再開した山歩き』（朝日新聞社）

『マゼランが来た』（朝日新聞社）

『山とスキーとジャングルと』（山と溪谷社）

『本多勝一対談集』（すずさわ書店）『ルポルタージュの方法』（同）

『カンボジアはどうなっているのか？』（同）

『アムンセンとスコット』（教育社）

『旅立ちの記』（講談社文庫）

編書『文筆生活の方法』（晩聲社）

『知床を考える』（晩聲社）

『加納一郎著作集』全五巻（教育社）

『虐殺と報道』（すずさわ書店）

日本語の作文技術

朝日文庫

1982年1月20日 第1刷発行

1990年8月10日 第19刷発行

著 者 本多勝一

発行者 木下秀男

印刷製本 凸版印刷株式会社

発行所 朝日新聞社

〒104-11 東京都中央区築地5-3-2

電話 03(545)0131（代表）

編集＝図書編集室 販売＝出版販売部

振替 東京 0-1730

©本多勝一 1982 Printed in Japan

定価はカバーに表示してあります

ISBN4-02-260808-0

日本語の作文技術

中学時代の日本語担任・故井上福実先生に捧ぐ

表紙・扉 伊藤 鑛治

民族の言語を、それとは知らずに執拗に維持し滅亡からまもっているのは、学問のあるさかしらな文筆の人ではなくて、無学な女と子供なのであった。だから女こそは日本をシナ化から救い、日本のことばを今日まで伝えた恩人なのであったと言わねばならない。

（田中克彦『ことばと国家』）

目次

第一章	なぜ作文の「技術」か	9
第二章	修飾する側とされる側	28
第三章	修飾の順序	44
第四章	句読点のうちかた	73
1	マル（句点）そのほかの記号	73
2	テン（読点）の統辞論	83
3	「テンの二大原則」を検証する	104
第五章	漢字とカナの心理	125
第六章	助詞の使い方	138
1	象は鼻が長い	144
	—— 題目を表す係助詞「ハ」	
2	蛙は腹にはヘソがない	159
	—— 対照（限定）の係助詞「ハ」	

3 来週までに掃除せよ 176

——マデとマデニ

4 少し脱線するが…… 179

——接続助詞の「ガ」

5 サルとイヌとネコとがけんかした 184

——並列の助詞

第七章 段落 190

第八章 無神経な文章 199

1 紋切型 199

2 繰り返し 205

3 自分が笑ってはいけない 211

4 体言止めの下品さ 217

5 ルポルタージュの過去形 219

6 サボリ敬語 222

第九章 リズムと文体 226

1 文章のリズム 226

2 文豪たちの場合 233

第一〇章 作文「技術」の次に 244

1 書き出しをどうするか 244

2 具体的なことを 262

3 原稿の長さや密度 274

4 取材の態度と確認 282

〈付録〉 メモから原稿まで 293

あとがき 317

参考にした本 327

解説 説（多田道太郎） 333

日本語の作文技術

凡 例

一、数字の表記は四桁法（日本式）とし、三桁法（西欧式）を排します。たとえば――

× 五〇三、九八七、一四六円 × 503,987,146円

○ 五、〇三九八、七二四六円 ○ 5,0398,7146円

○ 五億〇三九八万七二四六円 ○ 5億0398万7146円

× 五億〇、三九八万七、一四六円 × 5億0,398万7,146円

（理由は拙書『しゃがむ姿勢はカッコ悪いか？』〈潮文庫〉収録の「数字表記に関する植民地的愚拳」参照。）

二、人名はすべてその人物の属する国の表記法の順序そのまま使います。たとえばイギリス人やフランス人は「名・氏」の順ですが、日本人や中国人やベトナム人は、たとえフランス語やイギリス語の文中であっても「氏・名」の順です。現に中国も韓国もカンボジアもこれを実行しています。（理由は拙書『殺される側の論理』〈朝日文庫〉収録の「氏名と名氏」参照。）

三、The United States of America は「アメリカ合州国」と訳し、「合衆国」とは書きません。（ただし、「合衆国」が誤りだと主張するわけではありません。理由は拙書『アメリカ合州国』〈朝日文庫〉の「あとがき」参照。）

四、ローマ字は日本式（いわゆる訓令式）とし、ヘボン式を排します。（理由は『しゃがむ姿勢はカッコ悪いか？』収録の「ローマ字は日本式でなければならぬ」参照。）たとえば――

Shi→si, sho→syô, chi→ti, tsu→tu

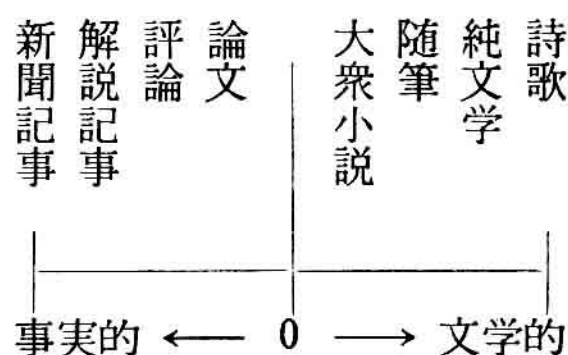
五、外国語のわかち書き部分をカナ書きにする記号は、ナカテン（・）を排し、二重ハイフン（＝）とします。（理由は拙著『日本語の作文技術』〈朝日文庫〉第四章で述べた使用法とわかち書きとの混用を避けるため。）たとえば――

× ホー・チ・ミン、ジョン・F・ケネディ、毛沢東の三人

○ ホー＝チ＝ミン・ジョン＝F＝ケネディ・毛沢東の三人

第一章 なぜ作文の「技術」か

ここで作文を考える場合、対象とする文章はあくまで実用的なものであって、文学的なものは扱わないことを前提としたい。とはいっても、両者にははっきりした境界があるわけでは決していない。朝日新聞社の調査研究室が社内用として非公開で出しているタイプ印刷の研究報告シリーズの中に『文章のわかりやすさの研究』（堀川直義・一九五七年）という一冊があつて、このあたりのことが次ページのように図式化されている。「事実的」のかわりに「実用的」とすることもできるし、あるいは右をフィクショナル、左をノンフィクショナルということもできよう。この分類でいえば右翼になる「文学的」な文章のための作文は、ここでは考えない。反対側の「事実的」文章のための作文だけを対象とし、その中には手紙・報告文・広告文・アピール・宣伝文・ルポルタージュなども含めてよいだろう。ただし日記は除外したい。例外はあるものの、原則として日記は自分だけのために書かれた文章だから、極論すればどんなわかりにくい文章でもよく、暗号でさえ構わぬことになる。また例文として小説から引用することもあるが、それはあくまで



「作文の技術」のためであって、決して「小説の技術」のためではない。言葉の芸術としての文学は、作文技術的センスの世界とは全く次元を異にする〔注1〕。その意味での「事実的」あるいは「実用的」な文章のための作文技術を考えるにさいして、目的はただひとつ、読む側にとってわかりやすい文章を書くこと、これだけである。

実はこうした文章論に類するものを書くことに、私はいささかの躊躇と羞恥をおぼえざるをえない。というのは、私自身が特にすぐれた文章を書いているわけではないし、もちろん「名文家」でもないからだ。それに、私のごく身近な周辺、つまり今つとめている新聞社の内部にさえ、私など及びもつかぬ名文家や、技術的にも立派な文章を書く人がたくさんいる。いわゆる年代的な「先輩」ではなしに、純粹に文章そのものから見ての大先輩に当たるそうした人々をさしおい

て、この種のテーマを書きつづることの気はずかしさを、読者も理解していただきたい。にもかかわらず書くのは、開きなおって言うなら、むしろヘタだからこそなのだ。もともとヘタだった。うまくなりたいたいと思いつづけてきた。中学生のころを考えてみても、同級生に本当にうまい文章を書く友人がいた。とてもかなわないと思った。はからずも新聞記者となつてすでに十数年、もはや「名文」や「うまい文章」を書くことは、ほとんどあきらめた。あれは一種の才能だ。それが自分にはないのだ。しかしこれまで努力してきて、あるていどそれが実現したと思っているのは、文章をわかりやすくすることである。これは才能というよりも技術の問題だ。技術は学習と伝達が可能なものである。飛行機を製造する方法は、おぼえさえすればだれにでもできる。発明したのはたまたまアメリカ人だが、学習すればフランス人でもタンザニア人でもエスキモーでも作れる。同様に「わかりやすい文章」も、技術である以上だれにも学習可能なはずだ。そのような「技術」としての作文を、これから論じてみよう。

だれにも学習可能な「技術」としての日本語作文を考えるに際して、よく誤解されている作文論があることを注意しておきたい。たとえば「話すように書けばよい」という考え方がある。だれだって話しているじゃないか。たいていの人は頭の中でいったん作文してから口に出すのではない。いきなり話している。それならば書くのだって同じだ。話すように書けば書ける。「作文」ということで緊張し、硬くなるから書けないのだ……と。

だが、この考え方は全く誤っている。話すということと作文とは、頭の中で使われる脳ミソの部分が別だというくらいに考えておく方がよい。文章は決して「話すように書く」わけにはい

かないのだ。たとえば話すときの状況を考えてみよう。多くの場合、話す相手がいる。その表情・反応を見ながら、こちらも身ぶりなどの補助手段で話をわかりやすくすることができ。したがっていわゆる文法的にはかなりいいかげんにしたり省略して話しても、必ずしも「わかりにくい」ということにはならない。さらに、相手がいない場合とか一方的に話すときでも、たとえばラジオやテレビで考えてみると、語り方の抑揚とか言葉の区切り・息つき・高低アクセント・イントネーションその他の手段によって、そのままわかりやすいかたちで耳にはいるようになっている。もし完全に「話すように書く」ことを実行したらどうなるか。実例を見よう。

おはようございますあれすかなおはようございますとおもるすらしいなはいどなたですか
あとおもおはようございますしつれえしますじつわはあじつわわたしこおゆうものなんです
が

これは保険外交員のような立場の人がセールスに訪問したときの対話のはじまりである。ちゃんとした「共通語」で話してもこのていどだ。実際に話しているときは、こんなわかりにくいことはない。書いてもわかりやすくするためには、さまざまに「技術」を使うことになる。すなわち――

「おはようございます」

（あれ、留守かな？）

「おはようございます」

（どうも留守らしいな）

「はい。どなたですか」

「あ、どうも。おはようございます。失礼します。実は……」

「はあ？」

「実は私こういうものなんです……」

これならわかりやすいだろう。ここで使われた技術は次の九種類である。

① 発音通りに書かれているのを、現代口語文の約束に従うカナづかいに改めた。

② 直接話法の部分はカギカッコの中に入れた。

③ 独白の部分はマルカッコ（パーレン）の中に入れた。

④ 句点（マル）で文を切った。

⑤ 段落（改行）を使って、話者の交替を明らかにした。

⑥ 漢字を使って、わかち書きの効果を出した。

⑦ リーダー（……）を二カ所で使って、言葉が中途半端であることを示した。

⑧ 疑問符を使って、それが疑問の気持を現す文であることを示した。

⑨ 読点（テン）で文をさらに区切った。

なんでもないように見えながら九種類もの「技術」が使われられているからこそ、これはわ

かりやすい形に変化したのだ。ついでに言えば、この中で最もむずかしい技術は最後の「読点」^{どうてん}（、）であるが、これについては一章をもうけて詳述しよう。もうひとつ別の例を見ていただきたい。

どっこにもかあちゃんひとりしかいじましたおったおいしいまだれもおどごあどあいねごっだ
そたにもなにへでよべえつとあへってありつてもいいごっだあははは

これは岩手県二戸郡一戸町面岸の老婆が語る言葉をそのまま書いたものだ。新聞記事にはこれにいくらか「技術」が加えられて、次のようになっている。

「どっこにもかあちゃんひとりしかいじましたおったおいしいま、だれもおどごあどあいねごっだそたにも。なにへでよべえつとあへってありつてもいいごっだ、アハハハ」(『朝日新聞』一九七五年三月二四日夕刊・文化面「新風土記」第三九七回)

すなわち前の例でいえば②カギカッコ④句点⑨読点の三つの技術のほか、さらにカタカナの使用によって合計四つの技術が加えられ、それだけわかりやすくなっている。実はこれは私自身の書いた記事なのだが、これ以上わざと技術を加えなかったのは、老婆から耳できいたときの「わかりにくさ」を、そのまま文章の上でも表現したい目的があったからである。逆にいえば、この文章を読んでわかるていどには、耳できいてもわかる。つまり音便と拗音^{ようおん}は耳できくそのままだし、句読点は耳できいてもわかる部分に限定した。したがって、このままの言葉でさらにわかり

やすくするための技術を使えば、次のようになる。

「何処どこにも母ちゃん一人しかいじましたおったおい今、誰も男おとこアビア居ねごつたソタニモ。
なにへで夜這よべえつとア入はいって歩ありつてもいいごつた、アハハハ」

ここまでくれば、この地方の方言を全く知らない人でも、およその意味はわかるようになるだろう。つまり言葉はそのままでも、文章化のとき技術を加えることによって、耳できいたときよりもずっとわかりやすくなっている。(これは「出かせぎでどの家も男たちがいなくなったから夜這いにはいっても何でもない」という意味である。)

しかし実は、この例の最初の原形(どこにもかあちゃん……)でさえも、厳密に言えば決して「話すように書いた」とはいえない。これには東北地方の方言を特徴づける母音構造(いわゆるズーゾー弁の由来)が現れていないため、すでにこの原形自体が共通語に変えられている。きびしくいえば、もはや「文字」にしたとたんに技術が加わっているのであって、方言であれ共通語であれ、話し言葉の正確な再現を文字で表すことは不可能なのだ。たとえば寿司(スシ)は、東北の一部ではススというようにきこえるし、小学生の作文でもそのように書いてしまうようだが、このススは決して煤(スス)と同じ発音のススではない(注2)。同様に橋と箸の区別は、話し言葉なら高低アクセントでわかるが、書いたら漢字を使わぬ限りわからない。私の故郷の伊那谷では雲はクモ(モにアクセント)というので蜘蛛(クモ)にアクセント)との違いが話し言葉ではわかるが、カナで書いたらわからない。